慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ベルリーン物語 : 文学首都の成立まで
Sub Title	A story of Berlin
Author	中田, 美喜(Nakata, Yoshiki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.40, (1980. 9) ,p.144- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・ 文学と都市
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00400001-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルリーン物語

——文学首都の成立まで

中田美喜

1

ドイツに首都の存在しないこと、それがドイツ文学のありかたにとって決定的なことである——前世紀のはじめにパリから来てライン河を越えたスタール夫人は、彼女一流の明快さをもって、現地の第一印象をまずそのように記している。ことによると彼女のこの『ドイツ論』の箇所からは、案内人アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの声が語っているのかもしれない。折からシュレーゲルはドイツでは初めて「批評と理論と歴史の総合に基づく」ドイツ文学論の構想をベルリーンで講義し終えたばかりのところであった。それはひとくちにいえば、新たな非合理主義による啓蒙主義の克服の主張であり、それの文学的実現としてのゲーテを頂点にもつ国民的近代文学の、すなわちギリシァ・ラテン主義に対するロマン主義の自己主張であった。あのボズウェルやあるいはヴォルテールなどが来て去ったあとの、ひさびさの気骨の折れるこの婦人客に対して、ヴァイマルをはじめとするドイツ各地の文人は一様に慇懃であったのだが、彼女の目当てが第一にはこの自分であると知りながら、「ヴェルターの詩人」は、彼女が充分気づくほどにつとめて他

の詩人たちのなかを隠れ回り、やがてその代りにシュレーゲルを最上の応接係としてじきじきに推薦するのである。そしてこの一切をのみ込んでいる、弁舌と客あしらいの点では数等弟にまさるロマン派のエイジェントが、ドイツに首都がないということから案内の口火を切ったことは大いに考えられることである。なぜならフランスから来た観察者とその背後にいるフランスの読者にとっては、それは比較という理解の方法において最もわかりやすい適切な方向づけであったであろうから。しかしながら私は悪意あるハイネとはちがって、ここにかならずしも「腹話術師のうら声」のみを聞きはしない。というのも、彼女がどうしても和解できなかったあのコルシカ生まれの男にそこを逐われて来たパリは、すべてのフランス作家の趣味を律するところであり、彼女のサロンこそいわばまさに文学的パリそのものであったのに、ラインの東はすべてがいなかじみて小さく、狭く、みすぼらしく、それらの風景は彼女の傷心を慰めなかったばかりか、一層パリへの思慕をかき立て、彼女にその風景のなかに常にパリへの対応を求めさせていたことがうかがえるからである。それにまた、むろん彼女はパリの読者のためにこの本を書いているわけだが、自分もパリなしでは済まないものの、この自分を欠いてよくも安閑と共和国の裏切者に熱を上げていられる無神経なパリに対して、パリは自分なしではなんと多くのものを失うことか、つまり気に染まぬ不在のうちにもこの自分がいかに一つの未知の国を見出したかをパリの人々に向かって示そうとしているのである。もともと精力的な女性であり、その貪婪な好奇心はしばしばドイツの人々を僻易させたが、自己の認識力に自信のある観察者として知り得かつ知る必要があると思ったことだけを、しかし最大限に、知ろうとした。首都の欠如の指摘がこの本の始めでなされるのは、初めてこの国に向かい合ったときの手がかりのなさ、展望のきかぬ心細さの経験に則した、彼女の効果的な方向づけと考えられてよい。

2

政治的現実として統一されたドイツが存在しなければ、ドイツの首都も存在しないのはあたりまえのことなのだが、国民としてのドイツ人なるものもまた存在せず、「サクソニア人、プロシア人、バヴァリア人、オーストリア人がそれぞれドイツ人である」（スタール夫人）。しかしそれならばそれでやはり首都はないのではなく、パリやロンドンとまではゆかなくとも、ドレースデンやベルリーンやミュンヒェンやヴィーンが、それぞれがドイツの首都ではないか。地方の首都でよいのではないか。ほかにもライプチヒやハンブルクやフランクフルトなど、ドイツの歴史にふさわしい都市があるではないか――いや、そういうわけにはゆかなかったのである。近代ドイツの歴史がフリードリヒ大王からビスマルクにいたるプロイセンの歴史、その勃興とドイツにおける覇権の確立あるいはプロイセン国家としてのドイツ統一の達成の歴史であったとすれば、われわれの関連でいうなら、それはまたベルリーンが他の諸都市を追い抜いて古い地方首都から新しい首都へ変容する歴史、ドイツ人が自分たちもまたベルリーンにおいて「パリやロンドンのような」首都を欲し、獲得してゆく歴史、それゆえの努力や忍耐、労働や投貸、建設や破壊、成功や挫折、希望や感傷、幻想や幻滅、幸福感や勝利感、劣等感や誇大妄想の歴史であったといえよう。さらに、プロイセンの伸長のその急速さは、ベルリーンの建設を相乗的に加速させたともいってよく、十八世紀以来ここでは静かなゆるやかな成熟と風化を待ちきれぬ性急さで新しいものが古いものに混じり、調和の犠牲の上に近代が優雅と気品に対して臆面もなく勝ち誇るのが見られ続けた。

このようなベルリーンに対しては多分あらゆる動機からするあらゆる種類の批判や中傷が可能であったろう。生粋の

ベルリーン子で皮肉屋のグラスブレナーの「ここはベルリーンのパリ、あそこはロンドン、ここはからすの里、あそこは兵営、ここはデモクラシー、あそこはお役所、ここはアーメンの御堂、あそこはいらっしゃいの市場――」といった、あるいは罪のない自己揶揄まで含めて。大ドイツ主義も地方分権主義もベルリーンの膨脹を止めることはできず、ヴィーンはベルリーンからの隔離によってますます古くなるばかりであり、ミュンヒェンもベルリーンと対抗するかぎりますますいなかじみてゆくだけであった。このベルリーンにとってただ一つ恐ろしいのは、一八四七年になっても「ベルリーンはさしあたりはまだ首都とはいえない」(ツルゲーネフ)という批評を聞くことであり、一八七一年晴れて帝国首都と認められ、まだ歓喜のさめやらぬときに、人もあろうにあのフォンターネから「おおベルリーンよ、おまえはドイツ帝国の真の首都からなんと遠くにあることか」と呼びかけられることであった。スタール夫人の用語では素朴に「熱心な模倣」ということになろうが、一種の追跡妄想のなかで、自分がならねばならぬものになることを追い求めて、ベルリーンは――パリでもロンドンでもなく――ベルリーンになってゆく。

3

一七九八年ベルリーンでロマン派の烽火の『アテネーウム』が出たあと、ゲーテが兄シュレーゲル宛てに『マイスター』への一同の熱心な関与を謝しつつ、「ベルリーンの諸氏によろしく」と挨拶を送るとき、当時の文学的ドイツの比重が、単に世代の交替というだけでなく、すでにヴァイマルからベルリーンへと傾いて来ていると考えるべきである。それは、同じ年にティークが、シュレーゲルに励まされて、自分の『シュテルンバルト』をゲーテに献呈する際でも、方向は一見逆に見えて、実際の意味に大したちがいはない。しかし、翌九九年フィヒテがいわゆる「無神論争」の

結果イエーナを去り、ベルリーンへ向かったとき、振子ははっきり振れたといってよかった。兄シュレーゲルがイエーナに留まっているのも時間の問題である。医者のフーフェラントが王の侍医となってベルリーンに招ばれてゆくのを引き止めることができようか。櫛の歯を引くがごとくというが、ヘルダーは老耄し、オスマンシュテットの隠退所を諦め悪く出たり入ったりするヴィーラントとこそこそ連れ立って、隠居旅行の感傷に耽っている。そしてシラーは、その高貴な嫉妬心のおかげで心ならずもあれら若い才能ある連中と隔てられているが、このいまはただ一人の友シラーは病気で、やがて死ぬだろう。

もともとベルリーンには文学的先住民がいた。レッシング、モーゼス・メンデルスゾーン、フリードリヒ・ニコライなど、いわゆるベルリーンの啓蒙主義者たちであったが、頑固な反ゲーテの本屋のニコライを除いて、彼らの王フリードリヒ（一七八六年歿、このころティーク少年は郊外の旗亭で、ゲーテと同い年のミラボーが、特産の白ビールを傾けるところを見た）と前後して亡くなっていた。跡継ぎの好色家で信心屋のフリードリヒ・ヴィルヘルム二世が、対仏戦争のぶざまな失敗ばかりでなく、悪名高い宗教令と検閲令でケーニヒスベルクのカントに臆病風を吹き込んだりして、伯父の遺産をめちゃめちゃにして死ぬと（一七九七年）、ベルリーンにはフリードリヒ・ヴィルヘルム三世と、とりわけ人気の高い王妃ルイーゼとともに、敗戦後と短かい平和の時代に特有の開放的な文学的な華やぎが訪れる。そして新しい移住者たちの群れと。理解力のあるあまり常に優柔不断であったと後世批評のかんばしくない文学的なこの王は、しかしとにもかくにもナポレオンを降した（一八一四年、これでスタール夫人もやっとパリに帰り、『ドイツ論』をロンドンではなくパリで出すことができる！）のであり、以後その勝利の栄光と産業革命の文明的恩恵に支えられながら、王政復古時代の先までもベルリーンを保護し続けるのである。シャードー作のミネルヴァの四頭立ての戦車像がふ

たたび、しかしこんどは西向きに据えられたブランデンブルク門から来るところ、ウンター・デン・リンデンの大通りに立ち並ぶ館と行き交う人々のにぎわいを、ジャック・カロ風に描き出すホフマン、フランス軍の占領中王に置き去りにされていた間、バンベルクなどのどさ回りをしながら楽長で食いつないできて、いまはシャミッソーやブレンターノなどを伴って憲兵広場は『ルター・ウント・ヴェーグナー』の酒場にすわっている常連、昼間の思想犯取締り治安判事のこのホフマンは、自由戦争後の繁栄に湧きかえる首都の昼と夜の、活力と倦怠と喧騒と頽廃の空気なしにはもはや生きられなくなった、早出の神経症の都会人として思い浮かべられる。

一八一〇年には大学が創られる。フンボルト、フィヒテ、フーフェラントらがその主要な役を演じた。彼らは、もしそういってよければ、みなゲーテの友人であった。イフラントはここの国民劇場と王室劇場をすでにドイツ一の水準に高めていたし、ゲーテやシラーをここに行き渡らせた。しかしゲーテの「敵」たちもまたこのベルリーンでは生きることができた。自分こそヴァイマルの生まれであり、宮廷との繋がりも浅くなかったのに、オーストリア、ロシアと他国で座付作者を勤めて回り、あげくはツァールのむら気のためにシベリア送りの憂き目まで見させられた、多少滑稽なしかし人気者の才子コッツェブーにとって、ここは自作がイフラントによって演じてもらえ、『公明人』なる名で新聞を出しても咎められることのない、「妻にも自分にも大変」住みごこちのよい場所であった。そしてそのコッツェブーを軽蔑し、イフラントにも拒絶された劇作家のあのクライスト、彼もまた痛ましいヴァンゼーの前年、満身創痍でドレースデンからやっとここにたどり着き、アーダム・ミュラーの顔とヒッツィヒの金をたよりに『ベルリーン夕刊新聞』なる、彼としては生き残るための最後の、せつなくはかない戦いに出ていた。狭いいなかの人間とくだらぬ雑本の知識しかないとドイツのパルナソスの軽侮を受けて来た、あの流行の小説家ジャン・パウルはここではとりわけ婦人たちのアイド

ルであった。彼はこれらのファンの高貴な代表たるルイーゼ王妃から銀の食器一そろいを贈られたが、すすめられた僧会議員の職はもちろん丁重に辞退して、ヘンリエッテ・ヘルツのサロンの方を選んだ。

そのとおり、ベルリーンには婦人がいた。婦人の主宰するサロンまでがあった。パリのように。ヘンリエッテ、旧姓はデ・レモス、シュライヤーマッハーの愛人、そしてラエル・レヴィン、のちのラエル・フォン・ファルンハーゲン、この二人のユダヤ才女のサロンは文学的ベルリーンの花壇であった。そのとおり、ベルリーンは少くとも一時期、ヨーロッパでユダヤ人解放が最も進んだところでもあった。ちなみにフリードリヒ・シュレーゲルの妻ドロテーアの再婚前の姓はファイト、その前はメンデルスゾーンである。

自由の民である文人にとってベルリーンにはいまや他のどこよりも多くの自由があった。それが彼らをここへ引き寄せる最大の魅力であったにはちがいないが、同時に彼らは自由だけではなく、生存を求めてやって来たのであった。もともと十七世紀以来文人の典型的な生活形式は、諸地方の大小の宮廷の廷臣あるいは食客としてのそれであって、されば こそゲーテもまたフランクフルトからヴァイマルに赴いたのであった。しかし同じくシュトゥルム・ウント・ドラングのなかまでも結局ロシア軍の士官になって去ったクリンガーの例にも見られるように、こうした古典的な仕官の道はゲーテ以後は極度に減少して行った。多くの苦労の末ゲーテの骨折りにより、それもイエーナの大学を経由してヴァイマル入りをしたシラーがほとんど最後といってもよかった。一七六〇年代以降生まれの者で文学にあるいは文学で生きようとする人々には、従って新しい生きかたが始めから運命づけられていたといってよい。簡単にいえばクリンガーのようにまったく別の職業に就くか、シュレーゲル兄弟のように学者になるか、それとも「自由な著作家」に留まるかのいずれかである。この第三の道は聞こえはよいがすなわち職業的文士、つまり売文によって生活を立てる者のいいにほ

かならない。いまやこれらの文士の多くが、招かれないで、「自由な」ベルリーンにやって来た。かつて「自由な」レッシングが売文に疲れてヴォルフェンビュッテルへと去ったベルリーンに、どこよりも多くの機会と出資者と読者を求めて集まって来た。たとえどこからであろうと、ベルリーン行きは「上り」になっていった。売文のもの悲しい極端な例は『ベルリーン夕刊新聞』である。それは日曜以外の毎日五時に、当時異例なこととして予約購読者以外にも売り出されるタブロイド版で、発行者クライストはみずからその大半を毎日、のち珠玉とも不朽とも呼ばれるようになった例の短篇などの原稿で埋めていたのであった。特にあの有名な気球の打揚げのときは、彼は午後二時まで現場にいて記事を書き、それから急いで「気球は四時までは揚がらないであろうという予想」をくっつけて、五時の発売に間に合わせるよう印刷所に走った。これが軍人を放棄し、学者も断念して、ドイツ語でいう「鳥のように自由な」作家の道を選んだ一七七七年生まれの若者の、最後の戦いの姿であった。それはまた作家の存在形式という点で「若いドイツ派」たちの姿の早い先取りでもあったといえよう。

文士、とりわけ若い文士たちにとって必要なものは出版援助者と読者だけではない。「なかま」もまたほとんど欠かすことができない。第一に相互扶助ということもあり、特に相互宣伝ということがある。文士たちはよく群れるが、それにはむしろ経済的な見かたがなされるべきで、その点ロマン派といえどもハイネの罵るように徒党（コーテリー）ではなかった。文子の連帯の見やすいかたちは雑誌であるが、十九世紀初期の雑誌は貸本化された機関ではなく、手づくりの商品である。一方ではいわゆる同人雑誌の性格を充分持ちながら、他方作家はそれを売って金を得る発行者でもあるのが特徴であり（したがってよく売れる雑誌というものはヴィーラントの『ドイツのメルクール』のように作家の大きな私有財産であった）、しかしおおむね財政難であって、得てして短命をまぬかれず、大半は続き物の共著や一回きり

の個人的アンソロジーのようなものであった。出版業界はまだ野放しの状態に近く、作家の経済生活はもちろん不安定で、この意味からの「ドイツ文学の存在の条件」（ペルテス、一八一六年）は極めて脆弱であった。が、ベルリーンは文士たちにとって大きな市場であった。こうして信条・傾向・出身・年代等を異にするこれほど多くの文士ないし文士の集団を同時に抱え込むベルリーンが、シュプレー河畔のアテネと呼ばれても、もはやなんらさしさわりもあるまい。そしてこのアテネが一八四〇年に、フリードリヒ・ヴィルヘルム四世によって招かれたシェリング、かつてゲーテによってイエーナに呼ばれ、のちミュンヒェンに移って「バイエルンのただ一人の思想家」といわれたシェリングを、亡きヘーゲルの後任として大学に加えるとき、さらに翌年、長くドレースデンにあってゲーテ（一八三二年歿）に代る文壇の大御所となっていたこの土地に生まれたティークを凱旋する将軍のように迎えたとき、それはついに名実ともにドイツ文学の首都となったといってよいであろう。

4

さて、カール・グツコーの『精神の騎士』は三月革命直後のベルリーンをその全体像において描き出そうとした特異な小説である。ここではベルリーンそのものが主人公となって、人物や事件は背景に退き、筋の時間的展開は細かく切断されていわば空間的に横に並べらればらまかれている。都市プロレタリアの生態を叙述したあの有名な『ブラント通り九番地』の章からもわかるように、この小説にはユージェヌ・シューの『パリの秘密』の強い影響があり、作者得意の「筋の空間的同時性」（「ネーベンアインアンダー」）からして実はそういってもよい。しかし両者の根本的な相違は、「社会主義者」シューがパリのさまざまな「秘密」を暗黒の深部からえぐり出すことに向かうのに対し、グツコーはベ

ルリーンのさまざまな顔かたちを見えるがままに写し取ろうとしたことにある。先のグラスブレナーの「ここはベルリーンのパリ、あそこはロンドン……」は、「そしてこれらのせめぎ合う性質のすべてを……」と続くのだが、それらの諸性質をそのままにベルリーンを写し出すダゲロタイプであり、また細部にわたって事実との照応関係の濃いいわゆるモデル小説の典型といえた。

二〇年代におけるサー・ウォルター・スコットのいわゆる歴史小説の流行は、人々にあらためて小説のおもしろさを教えるとともに、特にドイツの作家に、個人の内面に集中しがちな眼を外の世界に向けることを強いることになった。三〇年代に入るとその眼をこんどは歴史的な過去から現在へと向け直すことがあらためて強く要請されるようになり、そこから歴史小説に対するいわゆる現代小説（ツァイトロマーン）が生まれて来る。その最良の収獲であるカール・インマーマンの『おくれて来た者たち（エピゴーネン）』（一八三六）には、われわれの関連でいえば、王政復古期のベルリーンの生動する姿が驚きと感嘆をもって描かれている。しかし、すでにゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』が、象徴的な語られかたながら、この種の現代小説あるいは社会小説の先駆と考えられる一方、インマーマンの小説はその多くの現代描写にもかかわらず、それが「おくれた者」としての感傷的な内省の視点に収斂させられることによって、『諦めの人々』のそれこそ亜流に陥る危険を多く含んでいた。また四〇年代の見るべき企てとしてグツコーの小説の直前に出たローベルト・プルッツの『少女エンゲル』が挙げられようが、これはシューのパリをドイツ現代のいなかに移し変えたもので、作為的な「秘密」に溺れて、通俗的な犯罪小説に終った観がある。彼はベルリーンをこそ選ぶべきであったのだ。

そもそもスコットの歴史小説の歴史性は、一つには小説的人物や事件を通じてそれらを大きく包み込んでいる時代空

間を真の唯一の主人公として浮かび上がらせるという意味での歴史性と、いま一つは書きかたの歴史性すなわちビュフォン的な客観性と細部の具体性、いいかえれば写実主義にある。グツコーの『精神の騎士』はベルリーンという現代へのこのスコットの歴史小説の方法のラディカルな適用であった。事象の時間的継起が止揚され、横にならべられた事象がすべて隠された主人公ベルリーンへ回帰することをグツコーは望んだのであった。このグツコーの野心は四分の三世紀を経てデーブリーンの『ベルリーン・アレクサンダー広場』において実現される。

5

グラスブレナーの続きを最後まで聞いてほしい、「そしてこれらのせめぎ合う性質のすべてを脱け出し、ふだんの人づき合いをくぐり出てこそ、人はようやくほんとうのベルリーンに立ち帰る。」いったいほんとうのベルリーンとは何なのか。それはどこにあるのか。

ここでは彼のいう、ほんとうのベルリーンとは、繁栄に浮かれるいまの姿に対する文明批評などというよりは、都会化してゆきますます多くの移住者をかかえ込んで、その意味で逆にいなかじみてゆくともいえそうなベルリーンに向かって、不条理とは知りながらむかしのベルリーンとの自己同一性のあかしを求めないではいられない土地っ子の意地から出た、いわば反俗性の表現だと考えたい。前に引用したフォンターネも「真の（首都）」といういいかたをしているが、それも同様で、土地っ子の自分にしかわからないとか、おまえたちにはわからないという意味にすぎない。しかしそれでもわれわれがその言い分を肯じるのは主として次のような理由による。

われわれはこのような「ほんとうのもの」は眉つばであると知っている。そんなものはないと思っている。しかし同

時に情感としてはあるし、仮托としてはありうると思ってもいる。ひとたびそうした情感や仮托に身をまかせると、そのほんとうのもの」が実際に見えてくるということを知っている。グラスブレナーのいうほんとうのベルリーンの中味はわからないが、それが「想像された」ベルリーンとして「ありのままの」ベルリーンに対立させられていることはわかっている。それに一方の「ありのままの」というのが実はあやふやなもので、われわれ人間の場合、外のものの姿が写真の銀板に焼き付けられのとまったく同じようにわれわれの網膜にとらえられ、何らの想像力の沪過も蒙らないでいるという事態は考えにくく、手続きは逆なのであって、要するにわれわれには見たいと思うものしか見えないのだと考えるなら、例のちがいや対立は結局は姿勢や手法のそれにすぎないということになろう。ところが、というか、だからこそというか、姿勢と手法は分かれ目として非常に重要になってくる。ところで文学の世界のなかでは、すべての事象は想像力のなかで起こるのであるから、われわれは作家によって「想像されたベルリーン」をわれわれの想像力で受け取っているだけで、われわれにとってそれ以外に、たとえば外に、ベルリーンは存在しない。そのように一切の文学的真実性はいわば「見たことはないが似ている」という、われわれの了解の有無にかかっている。またその際、ことさら美化もデフォルメもしないという写実性の点に関しての、当の作家に対する一種の人間的信頼が重要である。彼は、われわれに見えないものを見るばかりでなく、われわれの見るものを否定することもできる、それが土地っ子の強味である。彼はシュプレー河の水の面に映る影のなかにベルリーンの自己同一性を、大都会のなかの彼らの郷土をはっきりと見ることができるのである。

「フォンターネは、セーヌ河畔のアテネにおけるバルザック、テームズ河畔のアテネにおけるディケンズのごとく、シュプレー河畔のアテネの二度めの創造者であった」とエーリヒ・ケストナーはいう。最も多くのわれわれが、フォン

ターネのベルリーン小説を通してベルリーンを知るばかりでなく、フォンターネの小説を通してしかベルリーンを知らず、しかもそれで満足しているということは、けだしフォンターネの卓越した功績である。彼の小説とともにわれわれは徐々に一八七一年以後の帝国期のベルリーンに入って行くことになるが、フォンターネの世界は、風俗的な様式化を受けたそれである。フォンターネが六〇歳を過ぎてから小説を発表し始めたということ、トーマス・マンのことばを借りれば、彼がはじめから年老っていたということが、歴史性とか批判性とかといった肩ひじ張った姿勢ではなく、諧謔味のある静かで透徹した、ゆるやかな筆致で、幾分少し古くなったかのような印象のあるこの町に住む人々、そこに起こる事件をしばしば会話を多くまじえながら、よく見知った風景とともに描き上げてゆく、一定した、安心のできる物語りかたを彼に得せしめたのかもしれない。しかしまた、常に若かったベルリーンもいまやいわば人並みに年を老って、たたずんでちょっと振り返る時期にそれが当たっていたというのであろうか、ベルリーンはフォンターネの小説のなかで生きたまま留まっているようである。